

賀さんは金沢と縁が深く、「金沢近代文学館」の中にゆかりのある現代作家として加賀さんの展示コーナーがあるらしい。うらやましいよね。岸上大作だって、姫路文学館にコーナーがある。東京生まれだとかなかそうはゆかない。

高山 多摩川の兵庫島（高山注・先生のお宅から最寄りの二子玉川駅にほど近い多摩川河川敷の公園にある）に若山牧水の歌碑があるので、あれの横くらいに佐佐木先生の多摩川の歌、〈空より見る一万年の多摩川の金剛力よ、一万の春〉の歌碑を建てたらずごくいいような気がする。

黒岩 いいねえ。みんなで募金から始めよう（笑）。

幸綱 話を戻すと、加賀さんは歌会後の後の二次会にも来てくれました。その席で「どうして加賀さんと知り合ったのか、その辺のことも語っておいたほうがいい」という話でした。そこで、まあ人物中心のコーナーをこの「ほろ酔いインタビュ」に新設しようという話になったわけです。今回は、矢代朝子さんの関係で加賀さんは歌会に来られたわけだけど、俺とも多少縁があった。河出書房の時代はほとんど会ったことがなかったような気がするけど、河出をやめて、しばらくして、七〇年代から八〇年代にかけて、小説をずいぶん読んでいたも

のだから、小説の時評とか書評とかをかき書いた時期があるんです。加賀さんが七〇年代終わりに『宣告』という小説を出された。「メツカ殺人事件」という、新橋のあたりのレストランだったかバーだったかで、天井から血が落ちて来る……。

全員 へーえ。

幸綱 それで、発覚する殺人事件があったて、その犯人（加古注・「正田昭」）がユニークな人物で、彼が主人公の小説です。加賀さんは精神科医だから、仕事として死刑囚の面接をされた。刑が執行されるまで何度も面会したということです。その『宣告』の書評を書いたことがあった。

黒岩 教誨師みたいな役割ですか。

幸綱 その折は宗教は関係なかったけどね。聞くところでは、犯人だった彼がキリスト教に入信して、熱心なキリスト教徒になる。それに影響されて加賀さんも入信されたらしい。その書評を書いたことがあって、知り合いというほどではないけど、ご縁がありました。

また、早稲田大学を定年になったころから、十年くらい前になるかな、日本芸術院の会員になりました。会員は二百人ぐらいいんだけど、その会でいろいろな出会いがある。加賀さんは、そこに先輩としておられた。菅野昭正さんが第二部（文芸部門）

の部長で、加賀さんと俺が部長代行ということで話をする機会があって、多少、知り合ったことです。芸術院では、三浦朱門さん、曾野綾子さん、黒井千次さんとか、そんなような人たちとも知り合ったりした。

加古（加賀さんとは）軽井沢で一回だけ、

